

が聯續して鳴る。

僕は無我夢中に、其の音色の空中に消えて行く。最後まで追ふものゝ如く、耳をトギスマス。

初めは十里四方に響き渡つて、宇和島まで聞えてゐるだらうとの妄想が、段々誇大して、紋のやうに擴がり、空氣のある所まで何んな遠方でも、之が轟ろかない筈がないと思ふようになつた。

聽覺位鋭敏に、神經を昂奮さすものはない。

僕の全身は耳になりきつてゐたかも知れない。

英國の首府ロンドンでは、今頃無線電信でもなき、變な音響が、一様に聞えるので、人々は號外を手にしなから、天を仰ふいで不審がつてゐる。

極東の日出づる國の、ダ、イストの戯れだとは氣がつかない。

又出石寺の山門のツリガネは、綱が切れて落ちたかも知れない。

誰もつかないのに、獨りでに鐘が鳴り出したので、小僧達は不思議に思つて騒いでゐる。

誰も此の漏斗と呼應してなり出したのだとは、思ひもよらないのだ。

此んな幻想は、それからそれへと、煙りの如くもやの如くなり、ヒタスラ叩いてゐる時に、外